
レインリリー

現 みか

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レインリリー

【Nコード】

N8294X

【作者名】

現みか

【あらすじ】

お母さんの治療の為、田舎に越してきた丘上小椋。
そこで一人の少年と出会う。

初恋は涙の味。

黄金の出会い（前書き）

小説初投稿になります。

至らない箇所も多々あると思いますので温かい眼で見ていただけると嬉しいです。

黄金の出会い

「重い…」

私はそう一人呟いて、首筋を伝っていく汗を拭った。

こんな事ならズボンを履いてこれば良かった。私はそう思わずに
いられない。せっかくだからとお気に入りのワンピースを着てきた
のだけれどさすがに動きづらいし、汗をかいているせいで足にまと
わりついてきて気持ち悪い。大体お母さんも電車が一本も走ってな
くて、最寄り駅から徒歩何十分ってかかる場所なら事前に言ってお
くべきじゃ無いのかなあ？なんて、普段はしない悪口がふと、頭を
よぎった。

右手に持った重い鞆を恨めしそうに見る。「はあ…」今日何度目
かのため息をついて前を見ると、ゆるやかな坂道になっていた。そ
の、頂上あたりにここからでも見えるほど、大きな樹が一本生えて
いたので、私は少し休ませてもらおうと思い、残りわずかな力を振
り絞って鞆を持ち上げノロノロと歩き出す。

右手に握ったままの地図はお母さんお手製のもので（途中からし
か書かれてないけどね…）、お母さんが入院していた頃では考えら
れないことだから、さっきの悪口なんて忘れてフツと柄にでもない
微笑を浮かべてしまう。地図を失くさないように鞆についている小
さなポケットの中に突っ込む。そうこうしている間に樹の元にたど
り着いた。どさつと大きな音を立てて鞆を置き、なるべく土がつか
ないところを探して私は樹の影に隠れた。

もう春も半ばだけど、冬の冷たさの残る風が頬を掠めた。疲れて
ぼてった体の私にはそのぐらいの冷たさが心地よかった。ふと下を
見るとここはちょうど少し小高い丘のようなところだったようで、
私がここまで来た道の全てが良く見える。

「うわー私あんなところから来たんだー」なんて考えていたら、
いきなり光が美しい黄金色に変わり、私の見ていた景色が、さっき

まで見ていた景色とはまったく異なった美しい景色に変わっていた。思わず息を吞んでしまう美しさに、そのまま時を忘れ少しの間風景をじっと見てしまっていた。その間にもう汗はすっかり乾いてしまつて、さっきまでは心地よかった風に思わず身震いいしてしまふ。そろそろ行かないと、私のペースじゃ家につくころには多分闇がお日様が完全に食べてしまふだろうから。

そうして立ち上がろうとした時だった。

「あれー？見かけない人だあ」

え？

男の子の声がどこから聞こえてた。

多分見かけない人というのは、こんな田舎では私ぐらいしかいないだろうから、私に話しかけているのだと思い、周りを見渡すと少し離れたところに同い年ぐらいの男の子が一人立っていた。黄昏時のせいで余り顔は良く見えない。

男の子は、私の方へと歩み寄ってくる。近くに来ることで私も男の子の大体の容姿が分かるようになってきた。頭は寝癖か地毛かピヨピヨと無造作に髪がはねていて、大きめの目は少しつりあがつている。男の子は何か嬉しいことがあつたのかどうかは分からないけれど、ニコニコと純粹で、さっきまで見ていた風景よりも綺麗な笑顔で笑っていた。目が合ったその瞬間に、心臓がトクンと高鳴った。

だって、黄金色の美しい光に包まれている男の子は、とても綺麗な瞳を持っていたのだから。

「ねえ、もしかして君が引越してくる子？」

物珍しそうに男の子は私の顔をマジマジと見つめる。

「え…と、うん。そうだけど…？」

そう言った瞬間、さつきでも十分に眩しかった男の子の顔がパツと一段明るくなった。

「そうなんだ！！あ…そうだ！！名前言ってなかったよね？俺のことは愁しゅうって呼んで。中学2年生なんだ！！」

とろけそうな笑顔のまま、一気に喋りきり、私のほうへ手を差し出した。その意味が私には良く分からず何もせずにいると、愁は不思議そうな顔をして、

「…？どうしたの？握手嫌い？」

と、私に聞いてきた。それでようやく私は愁が何を求めているのかを理解し、アタフタと愁に手を差し出し、愁と握手をした。愁の手はすごく暖かった。握手をしたら、愁は又嬉しそうにニコニコ笑いだし、その笑顔は私が見てきた人たちの中で、最も綺麗で純粹だった。

「あ…ねえそういえば、君はなんていう名前なの？」

ん？…そういえば、私はまだ名乗って無かったんだった。

「あつと…私の名前は丘上 小椋、愁と同じ中学2年生です。」

愁と同じ様に簡潔に自己紹介をし、ペコリと、つい条件反射で軽い会釈《えしゃく》をしてしまった。

「え！？あ…ああと、よろしくね！！」

私が愁に握手を求められたときのように愁もあわてて私と同じ様にペコリと頭を下げた。その姿が余りにも可愛くてつい笑い笑ってしまった。

「…？…？」

愁は私を見て何故笑っているのか分からないといった風にしばらく首をかしげていたけど、すぐに私につられてか、私と同じ様に笑い

始めた。その瞬間はとても素敵で、輝いているように思えた。

しばらくそうして二人とも何が可笑しいのか笑いあっていると、

「ねえ荷物持つよ？」

「え？」

愁に唐突に話しかけられ、素っ頓狂《すつとんきょう》の声をあげてしまった。

「荷物持つよって言ったんだけど…迷惑かなあ？」

何を、勘違いしたのか愁が申し訳なさそうにシヨボンと小さくなつてしまいつたから、誤解を解こうと

「迷惑なんて思ってたな「そつか。じゃ…」へ？」

迷惑なんて思ってたない。私とそのせりふを言い終わる前に、愁は私の荷物を「おいしょ」といとも簡単に持ち上げてしまっていた。

「あ…ありがとう」

持つてくれるのだから、御礼ぐらい言わないと思うて咄嗟に出た言葉だったつけれど、愁は優しくにつこり微笑んでくれた。それが、どうしようもなく嬉しくてしょうがなかった。

そのままなんやかんやで、家まで送ってもらいました。

愁。そう名乗った男の子は、とても綺麗な瞳で笑う人だった。愁の笑顔を思い出すと、頬が緩み安心してしまう。会ったときからず

つと、心臓が今までに無いくらい早く脈を打っているけれど、それすら心地よく感じる。

私は一体どうしてしまんだろ。こんな事今まで一度だって無かったのに。

黄金の出会い（後書き）

丘上 小椋

亜麻色の肩まで届かないぐらい短い髪を持っている。
髪の手ふわふわ。

お母さんの治療の為医者に進められて越してきた。

元々お母さんが一人で住む予定だったけれど、お母さんの病症が良くなったので、今回一緒に住むことになった。

注 1 話現在ではの設定です。

文章力無い上に説明下手のせいで、訳が分からなかった人もたくさんいると思うので…一応補足です。

誤字脱字、他ここらへんが良く分からない、ここはこうした方が良いというところがあれば、ご指摘お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8294x/>

レインリリー

2011年11月12日09時42分発行